

幼児の健康な心と体を育てる
領域「健康」に関する保育内容の検討

永田 誠・玉江 和義

Study of Early Childhood Education Curriculum Concerning the "Health" Area

NAGATA, Makoto and TAMAE, kazuyoshi

大分大学教育学部研究紀要 第41巻第2号

2020年3月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 41, No. 2, March 2020

OITA, JAPAN

幼児の健康な心と体を育てる 領域「健康」に関する保育内容の検討

永 田 誠*・玉 江 和 義**

【要 旨】 本研究は、2021 年度に大分大学教育学部において新たに開設する予定である「領域に関する専門的事項」に関する科目である「幼児と健康（仮称）」の内容構成を構想するために、関連する専門領域における知見をもとに検討することを目的とする。そのため、特に本稿では、それぞれの専門分野の学問的知見を基盤としつつ、「幼児」や「幼児教育」の視座から領域「健康」における保育内容を検討することで、「領域に関する専門的事項」に関する科目の内容として構想・編成するための知見と視角の提示を図るものである。

【キーワード】 幼稚園教育要領 保育内容 健康

I はじめに

本研究は、2021 年度に大分大学教育学部において新たに開設する予定である「領域に関する専門的事項」に関する科目の「幼児と健康」「幼児と人間関係」「幼児と環境」「幼児と言葉」「幼児と表現」（いずれも仮称）の内容構成を構想するために、関連する専門領域における知見をもとに検討することを目的とする。そのため、本稿では、分担執筆者らの有するそれぞれの専門分野の学問的知見を基盤としつつ、「幼児」や「幼児教育」の視座から捉え直し、「領域に関する専門的事項」に関する科目の内容として構想・編成するとともに、新たな知見と視角の提示を図るものである。本稿では、2016 年 12 月に出された中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（以下、「中教審答申」と略する。）ならびに 2018 年 4 月から施行された新しい「幼稚園教育要領」を検討の基礎とした。特に本稿においては、領域「健康」ならびに「幼児と健康（仮称）」について検討する。

本稿において主たる検討課題となる「領域に関する専門的事項」に関する科目は、2019 年 4 月より新教職課程がスタートするにあたり、これまで認定・指定を受けている教職課程が、引き続き教職課程を有するための課程認定（再課程認定）を受ける場合には、改めて文部科学大

令和元年 10 月 31 日受理

* ながた・まこと 大分大学教育学部発達科学教育講座（幼児教育学）

** たまえ・かずよし 大分大学教育学部芸術・保健体育教育講座（公衆衛生学・健康科学）

臣に申請を行い、2018年度中に認定・指定を受ける必要があることが示された。

こうした改革の後景には、それ以前の答申で提起された教員養成改革の影響があることも看過できない。中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」(2015年12月)において、これからの時代の教員に求められる資質能力として、①教員として不易とされる資質能力、②新たな課題に対応できる力、③組織的・協働的に諸問題を解決する力の3つを明らかにし、教員の養成・採用・研修を通じた取り組みを提案した。同答申を受け、2016年11月には、大学等の創意工夫により質の高い教職課程を編成することができるようにするために、教育職員免許法の一部改正が行われた。さらに、各大学における新しい教職課程を編成するための「教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会」が設置され、大学が教職課程を編成するに当たり参考とする指針となる「教職課程コアカリキュラム」(以下、「コアカリキュラム」と略する。)が2017年10月に策定された。

この「コアカリキュラム」ならびに「再課程認定」において、幼稚園教諭養成においては、「幼稚園教育要領」に示す5領域の保育内容に関する専門的知識を備えた専門性を学ぶ科目として「イ 領域に関する専門的事項」、5領域に示す保育内容を指導するために必要な力を学ぶ科目として「ロ 保育内容の指導法(情報機器及び教材の活用を含む。)」が設けられ、これら2つを包含する区分として「領域及び保育内容の指導法に関する科目」が創設された。この中では、①「教職に関する科目」の「教育課程及び指導法に関する科目」に位置づけられてきた「保育内容の指導法(情報機器及び教材の活用を含む。)」に関する科目の位置づけが変更されるとともに、②再課程認定以前には小学校教科専門科目との共通履修が認められてきた幼稚園の「教科に関する科目」が「領域に関する専門的事項」に関する科目として新設することが求められることになった。特に、②においては、課程認定委員会決定「平成31年度教職課程認定審査要領について」(平成29年11月17日)「4. 幼稚園教諭の教職課程について(通常の課程認定及び再課程認定)」において、表1のように示された¹⁾。

表1 課程認定委員会決定「平成31年度教職課程認定審査要領について」(抜粋)

4. 幼稚園教諭の教職課程について(通常の課程認定及び再課程認定)

改正規則附則第7項により幼稚園教諭の教職課程の「領域に関する専門的事項」を小学校教諭の教職課程の「教科に関する専門的事項」のうち国語、算数、生活、音楽、図画工作及び体育による場合の取扱いについては、以下のとおりとする。

- (1) 提出書類は小学校教諭の「教科に関する専門的事項」及び平成30年度認定までの幼稚園教諭免許状の教職課程の申請に係る「教科に関する科目」の基準を準用する。
- (2) 改正規則附則第7項により認定を受けた場合は、平成34年度末に「領域に関する専門的事項」に係る事後調査を行うこととする。

これにより、2018年度の再課程認定においては、「平成30年度認定までの幼稚園教諭免許状の教職課程の申請に係る「教科に関する科目」の基準」が準用されるものの、2022年度末までに事後調査を受けることが明示されたことにより、遅くとも2023年度の教職課程からは「領域に関する専門的事項」に関する科目を新設することが必須となった。

本稿の構成としては、「Ⅰ はじめに」、「Ⅱ 領域「健康」のねらいと内容」を永田が担当し、「中教審答申」や「幼稚園教育要領」の改訂を踏まえた保育内容「健康」の具体的なねらいと内容について概観した。その上で、「Ⅲ 幼児の生活に必要な習慣や態度の育成について公衆衛生学・健康科学からの検討」では、領域「健康」の「自分の体を大切にしたり、身の回りを清潔で安全なものにするなどの生活に必要な習慣や態度」の育成について玉江が公衆衛生学・健康科学の専門的知見から考察した。「Ⅳ 身体諸機能の調和的な発達を促す領域「健康」に関する保育実践事例の考察」では、領域「健康」の「自ら体を十分に動かそうとする意欲や進んで運動しようとする態度を育てるなど、身体諸機能の調和的な発達を促す」について永田が保育実践事例から考察した。最後に、「Ⅴ おわりに」は永田が担当し、ⅢならびにⅣをもとに、保育内容「健康」ならびに「幼児と健康（仮称）」の可能性と課題について言及した。

なお、本稿における保育実践事例については、大分大学教育学部附属幼稚園のご協力により提供いただいた。また、本研究を遂行するに当たっては、相手方の同意・協力ならびに個人情報取り扱いの配慮を必要とする研究内容が含まれており、調査対象者・協力園等の秘密保持ならびに人権の保護及び法令等の遵守には十分に配慮する必要がある。そのため、所属機関の規定に則り、「大分大学教育学部研究倫理審査委員会」に諮り、①研究等の対象となる個人の個人の人権の擁護、②被験者に理解を求め、同意を得る方法、③研究等によって生ずる被験者への不利益及び危険性並びに貢献の予測、④研究等に係る利益相反に対する審査を受け、承認を得た。

（承認番号：教研承・R1-014）

（永田 誠）

Ⅱ 領域「健康」のねらいと内容

「再課程認定」において新設された「領域に関する専門的事項」に関する科目については、2016 年度に文部科学省の委託を受け一般社団法人保育教諭養成課程研究会が、そのモデルカリキュラムを開発した。そこで示された科目の概要としては、表 2 の通りである²⁾。

「幼稚園教育要領」において、保育内容「健康」は、「健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う」領域であると記されており、そのためのねらいとして以下の 3 点が示される。

- (1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。
- (2) 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。
- (3) 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付け、見通しをもって行動する。

上記のねらいを達成するための具体的な保育内容としては、以下の 10 点が示されている。

- (1) 先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。
- (2) いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。
- (3) 進んで戸外で遊ぶ。
- (4) 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。
- (5) 先生や友達と食べることを楽しみ、食べ物への興味や関心をもつ。

表 2 「領域に関する専門的事項」に関する科目の概要

イ 領域に関する専門的事項

(1) 「領域に関する専門的事項」の考え方

○領域について、領域それぞれの学問的な背景や基盤となる考え方を学ぶことを基本とする。幼稚園教育において、「何をどのように指導するのか」という視点で見たときの「何を」にあたる部分である。幼稚園教育要領に示されているねらい及び内容を含めながら、これらに限定されることなく、より幅広く、より深い内容が求められる。

○各大学等で、「イ 領域に関する専門的事項」の科目を構成する場合、科目名は、必ずしも「幼児と○○」とするものではない。モデルカリキュラムにおいて「幼児と○○」とした理由は、本科目は各領域の背景にある専門的な視点からの領域の考える方を深めることを目指していて、その分野は多岐にわたることが予想されるが、必ず「幼児」「幼児期」「幼児期の教育」の視点を忘れないでということの意味するものである。

(2) 各大学等におけるシラバスを作成する際の留意事項

○領域の内容に関わる授業担当者の専門を生かしつつ、モデルカリキュラムの一般目標や到達目標を踏まえ、当該領域に関しての専門的な知識・技能等を修得できるよう、工夫していく。

○授業モデルを参考にして、主体的・対話的で深い学びとなる過程を保証する授業を構想していく。

(3) 授業担当者に求められること

○各領域に関連する学問分野を専門とする物が担当することになるが、いずれの場合も、「幼児」や「幼児期の教育」、「幼稚園教育」について、よく理解していることは重要である。

○「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。）」の各領域の担当者と連携を取る必要がある。「領域に関する専門的事項」に関する科目と、「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。）」に関する科目のどちらを先に教えるかによって、扱う内容が変わってくることが想定される。

(6) 健康な生活のリズムを身に付ける。

(7) 身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でする。

(8) 幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する。

(9) 自分の健康に関心をもち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。

(10) 危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する。

これらの「幼稚園教育要領」に示された領域「健康」に関する保育内容を概観すると、本学部において設定される「保育内容に関する科目（情報機器及び教材の活用を含む。）」に該当する「保育の指導Ⅰ（健康）」ならびに「領域に関する専門的事項」に関する科目に該当する「幼

児と健康（仮称）」における科目イメージ自体が具体化されよう。

実際に、『幼稚園教育要領解説』において、領域「健康」については「生涯を通じて健康で安全な生活を営む基盤は、幼児期に愛情に支えられた安全な環境の下で、心と体を十分に働かせて生活することによって培われていく」ことを前提条件として、「健康な幼児を育てることとは、単に身体を健康な状態に保つことを目指すことではなく、他者との信頼関係の下で情緒が安定し、その幼児なりに伸び伸びと自分のやりたいことに向かって取り組めるようにすることである」³⁾と言及し、他者との信頼関係や意欲的に取り組むといった内面性の育ちも含めた「健康」として捉えられる。

その上で、『幼稚園教育要領解説』では、領域「健康」において育てる心情・意欲・態度として以下のように示し、「体を動かすこと」と「生活に必要な習慣や態度」によって「見通しをもって自立的に行動していく」ことが求められている。

このような健康な心は、自ら体を十分に動かそうとする意欲や進んで運動しようとする態度を育てるなど、身体諸機能の調和的な発達を促す上でも重要なことである。特に幼児期においては、自分の体を十分に動かし、幼児が体を動かす気持ちよさを感じることを通じて進んで体を動かそうとする意欲などを育てることが大切である。

同時に自分の体を大切にしたり、身の回りを清潔で安全なものにするなどの生活に必要な習慣や態度を、幼稚園生活の自然な流れの中で身に付け、次第に生活に必要な行動について、見通しをもって自立的に行動していくようにすることも重要なことである⁴⁾。

そのため、指導する教師に求められる内容の取扱いに関する配慮・留意点として、「幼稚園教育要領」には以下の点が述べられる⁵⁾。

- (1) 心と体の健康は、相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、幼児が教師や他の幼児との温かい触れ合いの中で自己の存在感や充実感を味わうことなどを基盤として、しなやかな心と体の発達を促すこと。特に、十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること。
- (2) 様々な遊びの中で、幼児が興味や関心、能力に応じて全身を使って活動することにより、体を動かす楽しさを味わい、自分の体を大切にしようとする気持ちが育つようにすること。その際、多様な動きを経験する中で、体の動きを調整するようにすること。
- (3) 自然の中で伸び伸びと体を動かして遊ぶことにより、体の諸機能の発達が促されることに留意し、幼児の興味や関心が戸外にも向くようにすること。その際、幼児の動線に配慮した園庭や遊具の配置などを工夫すること。
- (4) 健康な心と体を育てるためには食育を通じた望ましい食習慣の形成が大切であることを踏まえ、幼児の食生活の実情に配慮し、和やかな雰囲気の中で教師や他の幼児と食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心をもったりするなどし、食の大切さに気付き、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること。
- (5) 基本的な生活習慣の形成に当たっては、家庭での生活経験に配慮し、幼児の自立心を育て、幼児が他の幼児と関わりながら主体的な活動を展開する中で、生活に必要な習慣を身に付け、次第に見通しをもって行動できるようにすること。

- (6) 安全に関する指導に当たっては、情緒の安定を図り、遊びを通して安全についての構えを身に付け、危険な場所や事物などが分かり、安全についての理解を深めるようにすること。また、交通安全の習慣を身に付けるようにするとともに、避難訓練などを通して、災害などの緊急時に適切な行動がとれるようにすること。

これらを踏まえるならば、単に運動遊び等を幼児と一緒に活動するだけでなく、より幼児が意欲的に取り組めるような環境の構成や気持ちよさを感じることができるよう配慮すること等も必要であり、指導法だけでなく、その専門的知見を理解しておくことが重要となる。

以上の領域「健康」における内容理解をもとに、本稿においては、特に「領域に関する専門的事項」に関する科目である「幼児と健康（仮称）」における内容構成について専門的知見をもとに検討する。

（永田 誠）

Ⅲ 幼児の生活に必要な習慣や態度の育成について 公衆衛生学・健康科学からの検討

幼児の心身の健康や健康生活を講じていく上で、最も重要な学問的根拠を導く領域は公衆衛生学である。それに基づいた実践的方法論を創出する領域を健康科学として位置付けることができる。これらによる学問的根拠や方法論に基づいた教育実践分野、それが学校保健である。学校保健とは学校における全ての公衆衛生活動を指すが、他の公衆衛生活動（母子保健、小児保健、産業保健など）との相違点は、その実践活動が教育として営まれるか否かにある。学校保健とは、教育として展開されるものである。

近年、21世紀の学校保健として Health Promoting School、あるいは Healthy School なる理念が拡充されている（本稿では、以下は Health Promoting School で統一）。単訳すれば「健康推進校」ということになるが、学校における学習や教育経験を通して青少年の健康と教育を高める学校全体のアプローチ⁶⁾であり、ヘルスプロモーションの理念に基づいて実践展開される学校保健、という意味である。

ここでヘルスプロモーションとは、WHO（世界保健機関）が1986年にオタワ憲章で提唱し、2005年のバンコク憲章で再提唱した21世紀の健康戦略であり、「人々が自らの健康とその決定要因をコントロールし、改善することができるようにするプロセス」と定義されるものである。いわば、自らの健康には自らが責任を持つ、ということである。学校において、系統的学習と包括的指導による保健教育、人的・物的な健康・安全管理による保健管理を通し、個々のヘルスプロモーション能力を涵養することを目的とするのが21世紀の学校保健、Health Promoting School である。

以上より、幼児における「生活に必要な習慣や態度」を育成、涵養するためには、模倣や遊びなどを通した一般的幼児教育にもヘルスプロモーションの理念が伴わねばならない。すなわち、幼児であっても、自らの心身に影響を与える要因を理解し、自ら健康的な行動が実践できるような能力を開発、進展することを期し、生活習慣・態度の教育を行なう必要がある。幼児が自らの健康や安全に対して興味関心を示し、思考を働かせることにパラダイムを置いた領域「健康」を講じることは、Health Promoting School としての幼稚園教育には意義深いといえ

る。

一方で、領域「健康」の内容論と方法論の充実を期するうえで、家庭影響に基づく個体差を充分に考慮する必要がある。生育状況は成育歴に依存する、という理に論は待たない。たとえば近年、米国の CDC (Centers for Disease control and Prevention)⁷⁾ は、未成年の健康を維持増進する上で、早産予防、母乳による育成のサポート、安全な家庭環境の構築、に注意を向け、成育歴が幼児の健康レベルの個体差を反映することを示唆している。同様に、家庭内での間接喫煙による悪影響についても CDC⁶⁾ は警鐘を鳴らしているが、成育環境は、予後の健康レベル、生活習慣や実践態度などに極めて強く結びつく要因であることを強く窺わせるものである。以上を踏まえると、幼児の個体差に起因する家庭影響や成育歴について多角的、論理的かつ客観的な評価・検討を試みることは、幼児における「生活に必要な習慣や態度」を導き、好ましく進展させるための有益な基礎資料になると考えられる。

ここまで、公衆衛生学、健康科学の観点から、領域「健康」の充実・進展を図るための重要な点として、1) ヘルスプロモーションの理念に則り、学校保健として営むこと、2) 幼児においても、自らの健康を考え、コントロールする能力を涵養、育成することをねらいとすること、3) 家庭環境からの影響や成育歴に対しての評価・検討を複眼的に試みることを挙げた。最後に、これらと同様、幼稚園教職員の各々自身が「生活に必要な習慣や態度」を維持増進する重要性、についても述べておきたい。

そもそも、学校保健の主たる対象者は、全ての学校に通う園児、児童、生徒、学生であるが、そこに従事する教員、職員も、常勤・非常勤を問わずして対象者に該当する。したがって、幼稚園においては、園児とともに、常勤・非常勤の教諭、職員へのヘルスプロモーションを講じられるべきである。

喫煙行動と年齢の関係⁸⁾ を例にとっても明らかなように、不健康行動の開始年齢が早ければ早いほど、当該の不健康行動から脱しにくくなり、また健康状態を増悪させる。幼児期は、予後の健康生活を担保するうえで極めて重要な時期といえる。そのために必要な「生活習慣や態度の健全な育成」とは、幼児だけでなく、教職員および保護者もその対象として位置付けることが必要である。これが幼児の「生活習慣や態度の健全な育成」に繋がる因子かもしれない。教職員および保護者の姿や言動、振る舞、雰囲気を含む、全ての営みそのものが、幼児が模倣する健康生活の対象になるからである。「子供は大人の言うことはきかないが、大人の真似はする」。この格言は、公衆衛生学の根拠からしても極めて的を射ている。

(玉江 和義)

Ⅳ 身体諸機能の調和的な発達を促す領域「健康」に関する保育実践事例の考察

子どもの基本的な生活習慣や運動・戸外遊びの経験が、家庭ならびに園との相互作用によって定着すると仮説的に設定するならば、園における経験の大きな要素となるのが、領域「健康」に含まれる保育内容であろう。したがって、領域「健康」に関する保育実践事例から、幼児の心身の健康に関する育ちを支える援助について考察してみたい。

事例 1 は、3 歳児 4 期 (1 月) の好きな遊びの時間における外遊びの事例である。この事例では、中庭での追いかけっこをしているが、子どもたちは頭に子ヤギのお面をつけ子ヤギになりきって、オオカミ役の教師から逃げようとしている。3 歳児の段階では、「いかに捕まらない

ようにするか」よりも、「追いかけられることから逃げる」ことや「捕まえようと追いかける」という行為自体に楽しさを感じていることが読み取れる。その上で、そうした子どもの「逃げる」「追いかける」という楽しさのきっかけとなったのがお面の存在であろう。子ヤギになりきり、恐いオオカミから逃げるという自身が物語の主人公になりきって遊んでいる。その過程では、逃げる役の子ヤギから、思い思いに自分になりたい「ヒーロー」や「警察」の役に変化し、逆に教師を追いかけることも楽しんでいる様子うかがえる。

こうした活動は、3歳児4期の教育課程を見ると、「進んで戸外で遊んだり、みのまわりのことをじぶんでしたりする」というねらいの「寒さに負けず、走る、漕ぐなどして戸外で全身を使って遊ぶ」（健康・人間関係）内容に対応するものである。また、この事例からは、単なる「走る」という行為に対して、「役になりきって遊ぶ」という要素を付加したことにより、子ども自身が自発的に運動する動機づけになるとともに、寒い時期であっても外に出て遊ぶ楽しさを感じる経験となっていることが看取できる。

【事例1】好きな遊び（3歳児） 4期（1月）

寒い日が続き、朝、空気の冷たさから保護者と離れる時に涙が出てしまう子どもも見られるが、その後は、外に出て中庭で元気に遊びだす。

3歳児の中庭では、頭に子ヤギのお面をつけ、オオカミと子ヤギになって追いかっこ。（写真）教師がオオカミになってみんなを追いかけると、「私はライオン！オオカミよりも強いんだよ」と言っており、逆に子どもたちが追いかけてくる。しだいに、「ぼくはヒーローになる」「私は警察」と、思い思いの強いものになりきって追いかけて、先生オオカミは、あっという間に捕まってしまう。



事例2は、4歳児3期（11月）の好きな遊びの時間における外遊びの事例である。この事例では、園庭前に置かれた木の板を見つけ、子どもたちなりに乗ったり、じゃんけん遊びをしたりする。そこでは、木の板に乗ってのじゃんけん遊びに展開し、これまでの遊びの経験から、じゃんけんに負けたら降りるというルールの下で、子どもたちなりの楽しみ方を見出している。また、「健康」の内容に即して述べるならば、寒い中でも戸外遊びを自発的に遊び出し、十分に体を動かそうとする姿が見られるとともに、木の板の上でのじゃんけん遊びは、戸外で体を動かすだけでなく、板の上でバランスをとる平衡感覚を養う遊びでもあり、身体の調和的な発達にもつながる。こうした活動は、教育課程における「運動遊びで思い切り体を動かし、意欲的に取り組む」ことをねらいとした「友達と簡単なルールのある運動的な遊びに興味をもって遊んだり、ルールを守って生活したりする」（健康・人間関係・言葉）内容に関連するものと位置づけられる。

この活動で注目すべきは、登園時に置かれていた木の板の存在である。これは、寒い中でも戸外遊びを楽しんでほしいという願いのもと、教師が意図的に置いたものである。また、これまでの戸外遊びでのじゃんけん遊びの経験を活かして、友達同士で遊びを考えながら楽しむことも想定した環境の構成である。こうした幼児の身体の調和的な発達を図る遊びにおいて、い

かに子どもが遊びたくなる環境をつくり出すかが教師の援助として重要な観点であることを示唆する事例である。

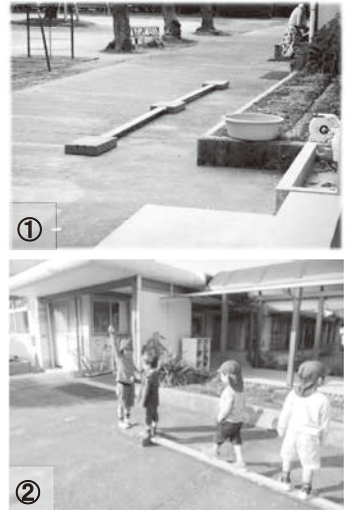
【事例2】好きな遊び（4歳児） 3期（11月）

だんだん寒くなってきて、「寒ーい」「いやだねー」「今日は3枚着てきた」などの言葉が聞かれる。

ある日、園庭に木の長い板が置かれているのを見つける。（写真①）「これ、何」と不思議そうに見たり、「見て。落ちないで渡れるよ」と上に乗ってみたいりする子どもたち。

木の板の上に乗って遊び始めると、渡ろうとする目の前に友だちが現れ、お互いに進めなくなる。すると、「じゃんけんしよう」「最初はグー、じゃんけんぽい」とじゃんけんを始め、勝った子どもはそのまま前へ、負けた子どもは台を降りる。

これをきっかけに、じゃんけんゲームが始まる。「やったー、勝った」と手を挙げる子ども、「負けた」と肩を落として降りる子ども、「今度こそ」と友だちの後ろに並びなおす子どもと、様々な反応も見られる。（写真②）



事例3は、巧技台を使って遊ぶ5歳児2期（5月）の事例である。この事例では、単に巧技台を積み重ね、遊ぶという運動的な遊びに加え、自ら道具を準備したり、遊び方やルールを話し合いから自分たちでいかに楽しく遊ぶことができるかを考えたりしながら行う活動となっている。この遊びの中で、子どもたちは巧技台に対して、「抱える」「持ったまま移動する」「乗る」「落ちないようにバランスを取る」「滑る」「順番を待って安全に遊ぶ」などの多様な動きが必要であり、楽しく遊ぶためには、それまでの経験をもとに自分自身の身体を意図的に操作する力が求められる。

この活動は、教育課程においては、「自分たちで思い切り遊んだり、生活のルールを決めて守ったりする」というねらいのもと、「身近な遊具や用具の使い方に慣れ、安全に使う」（健康・人間関係）や「友だちと一緒にルールを守って遊ぶ」（人間関係・健康・言葉）などの内容につながる活動であり、同年齢ならびに異年齢での集団づくりのもとでの運動遊びの事例と読み取れる。つまり、この事例は、「十分に体を動かす」「楽しんで取り組む」とともに、遊具を安全に使うことによる「安全に気を付けて行動する」ことにもつながるものである。したがって、遊ぶ前に、子ども自身が巧技台を運んで準備することや安全な遊び方を子ども自身が自ら考え、ルールを決める過程も、重要な教育的要素を含むものである。特に、巧技台は崩れるなどしてけがをすることも少なくないため、教師自身が一緒に考え、準備する姿勢が肝要であり、いかに子ども自身が主体的にルールを守って楽しく遊ぶことができるかが問われる。また、この事例には、年下の子どもとの異年齢でのかわりも含まれており、「幼稚園教育要領」に示される「具体的な活動を通した総合的な指導」の事例としても位置付けられ、幼児教育に携わる教師としての重要な観点を示唆するものであろう。

【事例3】巧技台を使って遊ぶ（5歳児） 2期（5月）

倉庫から、巧技台や橋、はしごをみんなで一緒に協力してホールへと運び出す。（写真①）

「どんなふうに遊べるかな」「どんなふうに運んだらいいかな」と教師が問いかける。安全に楽しく遊ぶための話し合いをみんなでした後、遊び始める。（写真②）

巧技台を友だちと一緒に思い思いに組み合わせていく。遊ぶ中で「全部繋げたら、楽しくなりそう〜」「ここ橋が斜めになって怖いね」「滑り台のところは少し高かった方がよく滑る」など友だち同士で思いを出し合う姿も増えてくる。（写真③）

楽しそうに遊ぶ年長児の姿を見て、年中児が様子を見に来る。「遊びたいな〜」という年中児の声に応え、「出来たからどうぞ」「上靴は履いてきてね」と年長児が言葉をかける。遊びだした年中児に年長児が「こうやって渡るんだよ」と優しく言葉をかける。「楽しい」といって繰り返し遊ぶ年中児の姿に、年長児も嬉しそうな表情を見せる。（写真④）「次は、ももばらさん（年少児）も呼びたいな」という声も年長児から聞かれる。



（永田 誠）

V おわりに

本稿は、2021年度に開設予定である「領域に関する専門的事項」に関する科目である「幼児と健康（仮称）」の内容構成を構想するために、玉江が公衆衛生学・健康科学の専門的知見から「自分の体を大切にしたり、身の回りを清潔で安全なものにするなどの生活に必要な習慣や態度」の育成について、永田が保育実践事例から「自ら体を十分に動かそうとする意欲や進んで運動しようとする態度を育てるなど、身体諸機能の調和的な発達を促す」ことについて、それぞれ考察した。

Ⅲにおいては、公衆衛生学、健康科学の観点から、領域「健康」の充実・進展を図るための重要な点として、1) ヘルスプロモーションの理念に則り、学校保健として営むこと、2) 幼児においても、自らの健康を考え、コントロールする能力を涵養、育成することをねらいとすること、3) 家庭環境からの影響や成育歴に対しての評価・検討を複眼的に試みること、そして、これらと同様、幼稚園教職員の各々自身が「生活に必要な習慣や態度」を維持増進する重要性

について言及した。

IVにおいては、領域「健康」に関する保育実践事例から、1) 外に出て遊ぶ楽しさを感じる経験、2) 子どもが遊びたくなる環境構成、3) 「安全に気を付けて行動する」ため安全な遊び方を子ども自身が自ら考え、ルールを決める過程の重要性について論述した。

これらの知見からは、幼児教育の段階において保育者は養護的視点からの幼児の心身の健康について配慮することはもちろんであるが、幼児自身が自らの心身の健康について関心をもち、健康的な生活を自らつくり出す力の育成が期待されていると言えよう。加えて、こうした取り組みは園保育だけでは達成することはできず、家庭・保護者、そして小学校や地域との緊密な連携や協同があってこそ、初めて実現されるものであろう。

最後に、今後の課題としては、幼稚園教諭養成の授業科目としての充実・改善を図ることはもちろんであるが、学部における養成する人材像に即した教育課程として編成していくかが問われよう。特に、2020年度から設置される「初等中等教育コース」では、これまでの小学校教諭1種免許状に加えて幼稚園教諭2種免許状の取得も卒業要件の一部として加わるとともに、中学校教諭免許状ならびに特別支援教諭免許状を取得する学生も幼稚園教諭免許状を取得する可能性を有する。加えて、「初等中等教育コース」では、小学校・幼稚園・中学校の複数免許取得を卒業要件とするだけでなく、「保育士資格取得支援プログラム（仮称）」の設置も計画されており、乳幼児期の成長・発達や福祉的側面の理解を深めた教員養成も企図されている。

したがって、就学前から義務教育段階までの教育を一貫して見通した中で、子どもの「育ち」と「学び」を支えることができる実践力と指導力を備えるとともに、大分県内を中心とした地域の幼児教育を牽引する力量を有した質の高い教員養成にいかに関与していくかが問われている。そのためにも、「領域及び保育内容の指導法に関する科目」として位置付く「領域に関する専門的事項」に関する科目と「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。）」に関する科目との科目間の整合性や連携、そして、幼稚園教諭免許状に関するカリキュラム全体でのより円滑な科目編成をどのように図っていくかという点での検討が求められよう。

（永田 誠）

付記

本研究は、2019年度大分大学教育学部・教職大学院短期プロジェクト（附属学校園や公立・私立の学校現場との研究教育連携プログラム）「学部教員と附属教員の協働による実践的保育研究—子どもの主体的な活動を支える保育を目指して—」の研究成果の一部である。

また、本研究にあたっては、石川照代園長をはじめ大分大学教育学部附属幼稚園の先生方には、事例の提供・使用をご快諾いただきましたことに改めて感謝申し上げます。

注

- 1) 課程認定委員会決定「平成31年度教職課程認定審査要領について」（平成29年11月17日）2017年、p.3
- 2) 一般社団法人保育教諭養成課程研究会「平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラム開発に向けた調査研究—幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保障を考える—」（文

部科学省幼児期の教育内容等深化・充実調査研究委託「幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究」) 2017 年, p.8-9

3) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』2018 年, フレーベル館, p.145

4) 同上書, p.145-146

5) 文部科学省「幼稚園教育要領」2018 年, p.12-13

6) Lawrence St Leger, Ian Young, Claire Blanchard, Martha Perry : Promoting health in schools: from evidence to action International Union for Health Promotion and Education (IUHPE), 2009, 1-13.

7) CDC : CDC works to prevent premature birth, support breastfeeding, and promote safe home environments. Promoting Health for Infants.2018, 1-4

8) Curry SJ, Mermelstein RJ, Sporer AK : Therapy for specific problems: Youth tobacco cessation. Annu Rev Psychol; 60, 2009: 229-255.

Study of Early Childhood Education Curriculum Concerning the "Health" Area

NAGATA, Makoto and TAMAE, Kazuyoshi

Abstract

The purpose of this paper is to examine the "Health" area of the early childhood education curriculum, from knowledge of related academic fields. The knowledge gained in this paper will be used for the lesson "Infant and Health (tentative name)", established in Oita University Faculty of Education in FY 2021.

【Key words】 Course of study for Kindergarten, Contents of the early childhood education curriculum, Health